

館林市内遺跡発掘調査報告書

— 平成15年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査 —

陣 谷 遺 跡 (平15地点)

妙 円 寺 1 遺 跡 (平15地点)

法 正 谷 遺 跡 (平15地点)

松 沼 町 遺 跡 (平15地点)

谷 向 遺 跡 (平15地点)

館 林 市 教 育 委 員 会

館林市内遺跡発掘調査報告書

— 平成15年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査 —

陣 谷 遺 跡 (平15地点)

妙 円 寺 1 遺 跡 (平15地点)

法 正 谷 遺 跡 (平15地点)

松 沼 町 遺 跡 (平15地点)

谷 向 遺 跡 (平15地点)

館 林 市 教 育 委 員 会

例 言

1. 本書は、平成15年度に国宝重要文化財等保存整備事業、群馬県文化財保存事業の補助金を受けて実施した館林市内の遺跡発掘調査の結果をまとめたものである。
2. 本書において報告する遺跡名は、「遺跡台帳」に基づき次のとおりである。地点名は、平成15年度調査であることから、「平15地点」とする。

陣谷遺跡（じんやいせき）

妙円寺1遺跡（みょうえんじいちいせき）

法正谷遺跡（ほうしょうやいせき）

松沼町遺跡（まつぬまちょういせき）

谷向遺跡（やむかいせき）

3. 発掘調査及び資料整理は、館林市教育委員会が主体となり実施したもので、調査組織は次のとおりである。

教 育 長 大塚 文男

教 育 次 長 三田 正信

主 管 課 文化振興課

文化振興課長 中村 慎六

文化財係長 阿部 博

学 芸 員 岡屋 英治(副担当) 阿部 弥生 原 幸恵 吉田 紋乃

主 事 釜島 美貴 打木 洋輔(担当)

4. 作業員

石井 悦雄 坂田 岩吉 高瀬 広 小林 俊彦 大澤平八郎 鈴木 正勝

吉村 昭和 堀越 峰之 吉田 敏雄 三田 雅敏

5. 調査による出土遺物、調査記録及び資料は、館林市教育委員会で保管している。
6. 本書の編集・執筆については、打木、吉村、堀越、三田が中心となり行った。
7. 調査の実施および本書の刊行にあたり、下記の諸氏、諸機関のご協力を頂いた。ここに記して感謝申しあげる次第である。(順不同、敬称略)

谷 艶子 栗原 正作 齋藤 司 飯塚 耕一 早川 武男 谷田川北部土地改良区
群馬県館林土木事務所

〈目 次〉

例 言

目 次

図版目次

写真目次

第 1 章 館林市の環境

1 地理的環境 1

2 歴史的環境 2

第 2 章 各遺跡の概要

1 陣谷遺跡 4

2 妙円寺1遺跡 9

3 法正谷遺跡 12

4 松沼町遺跡 16

5 谷向遺跡 20

参考文献

抄 録

〈 図 版 目 次 〉

第 1 図	館林市の位置	1
第 2 図	館林市の地形概念図	3
第 3 図	調査遺跡	3
第 4 図	陣谷遺跡 周辺の遺跡	4
第 5 図	陣谷遺跡 トレンチ配置図	6
第 6 図	陣谷遺跡 トレンチ平面図	7
第 7 図	陣谷遺跡 出土遺物実測図	8
第 8 図	妙円寺1遺跡 周辺の遺跡	9
第 9 図	妙円寺1遺跡 トレンチ配置図	11
第 10 図	法正谷遺跡 周辺の遺跡	12
第 11 図	法正谷遺跡 トレンチ配置図	14
第 12 図	法正谷遺跡 トレンチ平面図	14
第 13 図	法正谷遺跡 出土遺物実測図	15
第 14 図	松沼町遺跡 周辺の遺跡	16
第 15 図	松沼町遺跡 調査区域平面図	18
第 16 図	松沼町遺跡 出土遺物実測図	19
第 17 図	谷向遺跡 周辺の遺跡	20
第 18 図	谷向遺跡 出土遺物実測図	22
第 19 図	谷向遺跡 トレンチ配置図	23

〈 写真目次 〉

写真 1	陣谷遺跡 調査前景観	5
写真 2	陣谷遺跡 調査風景	5
写真 3	陣谷遺跡 トレンチ全景	5
写真 4	陣谷遺跡 遺構確認状況 (1)	6
写真 5	陣谷遺跡 遺構確認状況 (2)	6
写真 6	陣谷遺跡 出土遺物 (1)	8
写真 7	陣谷遺跡 出土遺物 (2)	8
写真 8	妙円寺 1 遺跡 調査前景観	10
写真 9	妙円寺 1 遺跡 調査風景	10
写真 10	妙円寺 1 遺跡 トレンチ完掘状態	10
写真 11	法正谷遺跡 調査前景観	13
写真 12	法正谷遺跡 調査風景	13
写真 13	法正谷遺跡 トレンチ完掘状態	13
写真 14	法正谷遺跡 遺構確認状況	14
写真 15	法正谷遺跡 出土遺物	15
写真 16	松沼町遺跡 調査前景観	17
写真 17	松沼町遺跡 トレンチ完掘状態	17
写真 18	松沼町遺跡 遺構確認状況	17
写真 19	松沼町遺跡 出土遺物	19
写真 20	谷向遺跡 調査前景観	21
写真 21	谷向遺跡 調査風景	21
写真 22	谷向遺跡 トレンチ完掘状態	21
写真 23	谷向遺跡 出土遺物	22

第1章 館林市の環境

1 地理的環境

館林市は、群馬県の南東部、関東地方のほぼ中央部に位置する人口8万人ほどの地方都市である。

市域は、東西約15.5km、南北約8.0kmと東西に長く、総面積は約61km²である。北は一部を除き渡良瀬川を隔てて栃木県に、東は邑楽郡板倉町、南は谷田川を隔てて邑楽郡明和町にそれぞれ接している。明和町の南には利根川が東流し、県境となっている。県庁所在地である前橋市までは約50km、首都東京（台東区浅草）へは約65kmの距離にあり、首都圏との結びつきも強い。

群馬県の東南部は、「邑楽・館林」地方と呼ばれ、群馬県のなかでは低地に位置している地域である。館林市の標高は、15m台（大島町東部）から32m台（高根町）であり、おおむね平坦であるといえる。

本市の地形を概観してみると、その地形は、大きく「低台地」と「低地帯」に分けることができる。市域のほぼ中央部に「低台地」が東西に延びるように所在し、その周辺に「低地帯」が広がっている。

この「低台地」は、「邑楽・館林台地」と呼ばれる洪積台地であり、太田市高林から本市中央部を東西に延び、隣接する板倉町まで続いている。また、大泉町古海から館林市高根に至る台地の北側に沿って、わが国最古の砂丘のひとつである埋没河畔砂丘が走っており、本市最高標高点はこの上にある。

「低地帯」は、おもに利根川や渡良瀬川によって形成された沖積低地である。台地北側の低地帯には、旧河道、微高地や自然堤防が目立ち、一方、台地南側の低地帯では、茂林寺沼をはじめ大小の沼や湿地帯が形成されている。

こうした台地や低地などからなる本市の地形は、北西から南東へむかって緩く傾斜する傾向が見られ、台地面と低地面の比高差も北部で大きく南部では小さくなっている。

「邑楽・館林台地」と呼ばれる洪積台地は、沖積低地へ流れ込む河川により樹枝状に開析されている。また、これに伴う市内最大の谷は、本市中央部を東流する鶴生田川から城沼にかけてのもので、台地を南北に二分している。こうした洪積台地を開析する谷には、他にも茂林寺沼、蛇沼、近藤沼などの池沼を伴うものが多く、本市景観の特徴のひとつになっている。



第1図 館林市の位置

2 歴史的環境

館林市内に所在する遺跡は、145ヶ所である。昭和63年刊行の『館林市の遺跡』（市内遺跡詳細分布調査報告書）には、そのうちの144ヶ所について詳細が報告されている。

分布調査による採集遺物から大別した、各時代の遺跡数は次のとおりである。

旧石器時代の遺跡3遺跡、縄文時代の遺跡13遺跡（縄文土器のみ採取できた遺跡）、弥生時代の遺跡は0（弥生時代の遺物を採取できた遺跡1遺跡）、古墳時代～平安時代の遺跡（土師器の出土した遺跡）96遺跡（うち縄文時代の遺物も採取できる遺跡は23遺跡）、古墳は17遺跡（古墳総数25基）、中世生産址1遺跡、中世城館址12遺跡、近世城館址2遺跡である。（ただし、複合した時代の遺物散布地が見られるため、その中心になると考えられる時代でまとめたものである。）

これらの遺跡の分布は、地形的な特徴と大きく関わっていることが観察される。

館林市内に所在する遺跡の時代的変遷と地形的な関わりを概略してみると、次のようになる。

《旧石器時代》

この時代の遺跡は、市内の標高の高い地域に集中する傾向を見せる。邑楽・館林台地の北西に沿って、「鞍掛山脈」と地元で呼ばれる内陸河畔砂丘（自然堤防）上に、その多くが確認されている。

《縄文時代》

この時代になると、遺跡数が増えるとともに洪積台地上に集落等が営まれるようになる。

前期や中期の遺跡は、池沼や谷地を望む舌状台地上の平坦面に確認されることが多い。

後期以降は遺跡数は減少し、その所在は、台地の斜面から微高地に移る傾向がある。後・晩期の包含層等は低地（沖積地）におよぶ。

《弥生時代》

弥生時代の遺跡として確認されたものはないが、微高地や台地の斜面等で、遺物などがわずかに確認されている。

《古墳時代》

前期の遺跡は少ない。遺跡は、洪積台地の斜面からテラス状の微高地に所在することが多く、この傾向は、弥生時代の遺物散布に似ている。

中期には、遺跡の数が増えるとともに、その所在は、台地の斜面から台地上の平坦面へと移行する。

後期には、遺跡数は増大し、台地上の平坦部に所在する場合が多い。

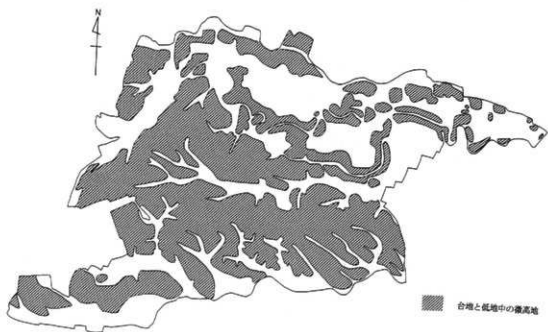
墳墓としての古墳は、25基が残存している。古墳群が2ヶ所あり、一つは日向地区を中心とする邑楽・館林台地上、もう一つは高根地区を中心とする内陸河畔砂丘上にある。その他単独のものも多いが、そのいずれもが、谷や谷地等をおもろす洪積台地上に所在している。

《奈良・平安時代》

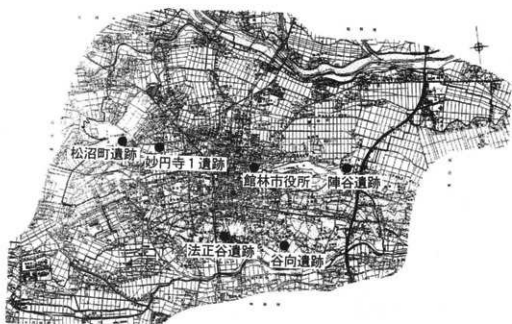
この時代の遺跡は急増する。台地の内部や全面で遺物の採取ができることから、この時代以降は台地上に普遍的に集落等が営まれてきたことを示唆している。

《中世・近世》

この時代の城館址については、伝説的な要素が多く実体ははっきりしないが、中世末には館林城が築かれ、現在の館林市の基礎となった。



第2図 館林市の地形概念図



第3図 調査遺跡

第2章 各遺跡の概要

1 陣谷遺跡（平15地点）

【立地と環境】

陣谷遺跡は、館林市の東部、東北自動車道路館林ICの北方約1,800mに位置する古墳時代から平安時代にかけての遺跡である。

本遺跡の発掘調査は、過去に一度行われており（平成3年度）、その調査では数件の遺構と数多くの遺物が確認されている。今回の調査地は遺跡範囲の南西部に位置し、平成3年度調査地点の西方にあたる。

遺跡は、邑楽・館林台地の東部で、同台地を大きく開析する城沼を南方に臨む台地の東南端に位置している。遺跡地の現在の標高は約18mで、周辺の低地（城沼）との標高差は約2mである。

本遺跡の周辺には、同じ台地上に、当郷遺跡（古墳から平安時代）、道祖神遺跡（古墳から平安時代）、村前遺跡（古墳から平安時代）が所在しているほか、城沼対岸の台地上に大袋4遺跡（縄文、平安時代）、町谷1遺跡（古墳時代）、町谷2遺跡（古墳、平安時代）、町谷3遺跡（平安時代）、下志柄遺跡（縄文時代）などが分布している。このうち、既往調査で居住址等が検出されているのは大袋4遺跡である。大袋4遺跡については平成14年度に調査を実施したほか、これまで数回の調査が行われている。



第4図 周辺の遺跡

【調査の概要】

本地点の発掘調査は、楠町3741-2、3741-4地内における露天駐車場整備に伴う事前調査として実施した。

調査は、計画地の地形にあわせ東西方向に2本のトレンチを設定し、地下の状況を確認した。

調査の結果、調査地の現地形は、ほぼ平坦な地形ではあるものの、北方から南方にむけて低くなっており、地表面で約10cmの高低差がみられた。旧地形においても、北方から南方にむけて低くなっていたことが判明した。

1トレンチでは、地表から深度約30cmのところでもろ層がみられ、住居址8軒（古墳～平安時代）、土壌4基（時代不明）などが確認された。

2トレンチでは、地表から深度約60～80cmのところでもろ層がみられ、住居址13軒（縄文時代1軒、古墳～平安時代12軒）などが確認された。

今回の調査では、両トレンチから住居址等が多数確認されたため、遺構等の取扱いについて地権者や開発業者と協議を行った。

協議の結果、今回の露天駐車場整備工事では現地表を掘削することなく工事を実施する旨が確認され、遺構等の現地保存が可能となったため、当該工事について支障はないと判断した。



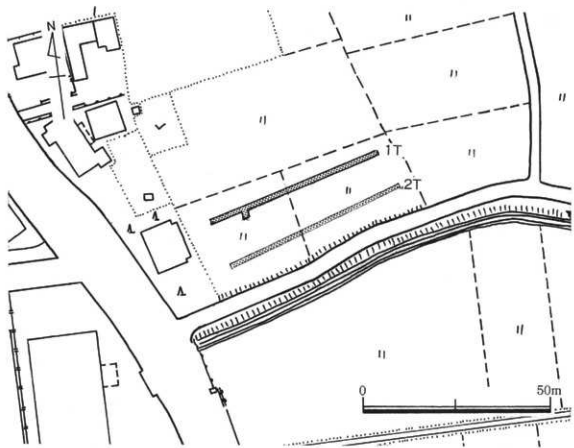
写真1 調査前風景



写真2 調査風景



写真3 トレンチ全景 (2トレンチ)



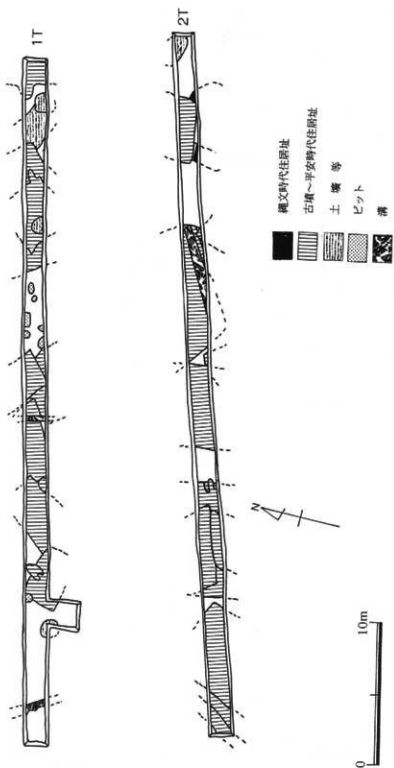
第5図 トレンチ配置図



写真4 遺構確認状況(1トレンチ)



写真5 遺構確認状況(2トレンチ)



第6図 トレンチ平面図

【出土遺物】

今回の調査では、数多くの遺物が出土した。そのなかで、実測、採拓したものを次のとおり取上げた。

1は、甕の完形固体である。2トレンチの中央部より出土した。住居址に伴うものと考えられる。高さ25.0cm、口径15.0cm、頸部の内口径10.0cm、口辺部の高さ4.0cmで、茶褐色を呈している。

2は、甕の底部の破片である。灰色を呈し、底部に糸切り痕がみられる。

3は、杯の底部の破片である。茶褐色を呈している。

4は、杯の底部の破片である。黒褐色を呈している。

5は、須恵器の胴部の破片である。焼成は良好で灰色を呈し、表面にたつき目がみられる。



写真6 出土遺物 (1)

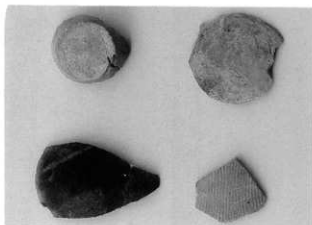
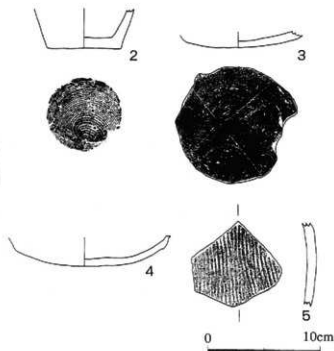
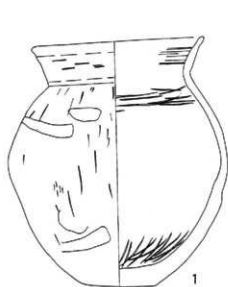


写真7 出土遺物 (2)



第7図 出土遺物実測図

2 妙円寺1遺跡（平15地点）

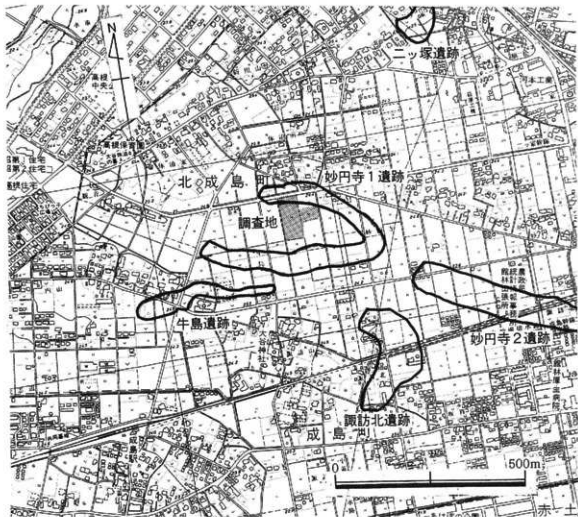
【立地と環境】

妙円寺1遺跡は、館林市の西部、東武鉄道小泉線「成島」駅の北東方向約700mに位置する平安時代の遺跡である。本遺跡は、館林市北成島町字妙円寺地内に所在しており、同字妙円寺地内にある「妙円寺2遺跡」と区別される。

本遺跡の発掘調査は、これまでに例がなく、今回の調査地は、遺跡範囲の北部に位置している。

遺跡は、邑楽・館林台地の西部で、同台地を大きく開析する城沼の支谷を東方に臨む台地上に位置している。遺跡地の現在の標高は約24.5mで、周辺の低地（多々良沼）との標高差は約4mである。

本遺跡の周辺には、同じ台地上に牛島遺跡（平安時代）が所在しているほか、周辺の台地上に諏訪北遺跡（平安時代）、妙円寺2遺跡（平安時代）が分布している。平成15年度時点では、いずれの遺跡においても発掘調査は実施されていない。



第8図 周辺の遺跡

【調査の概要】

本地点の発掘調査は、北成島町1645-1ほか3筆の地内における保育園建設工事に伴う事前調査として実施した。

今回の調査では、当該遺跡に既往の発掘調査例がないことを踏まえ、遺跡の保存状態、遺跡の範囲、遺構等の有無などの確認を目的とした調査を行った。

調査は、計画地の地形状にあわせ南北方向に6本のトレンチを設定し、地下の状況を確認した。

調査の結果、調査地の現地形は、北方から南方にむけて低くなっており、地表面で約20cmの高低差がみられた。旧地形においても、北方から南方にむけて低くなっていたことが判明した。

1～3トレンチでは、地表から深度約20～30cmのところでローム層を確認することができた。

4～6トレンチでは、各トレンチの北側および中ほどで地表から深度約20～30cm、南側では深度約60～80cmのところでローム層を確認することができた。

今回の調査では、各トレンチからローム層を掘り込む黒色土部分がいくつか確認されたが、いずれもビニールやガラス片を伴っており、土器片等も出土しなかったことから、今回の保育園建設工事について支障はないと判断した。

【出土遺物】

今回の調査において、特筆する出土遺物は検出されなかった。

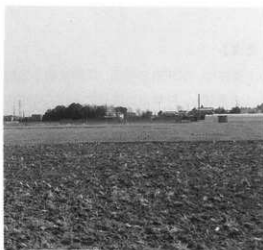


写真8 調査前景観

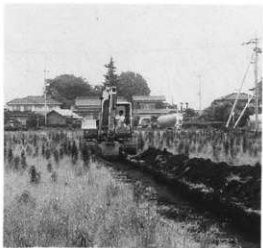
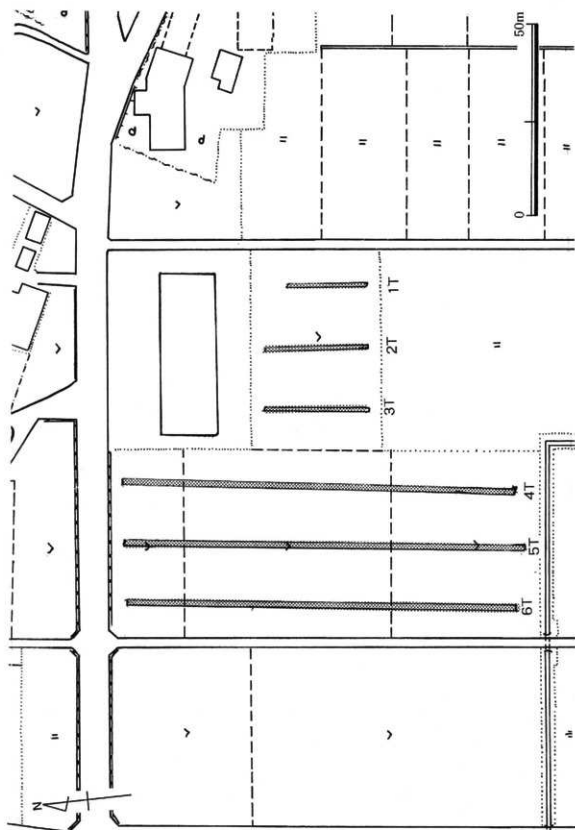


写真9 調査風景



写真10 トレンチ完掘状態 (5トレンチ)



第9図 トレンチ配置図

3 法正谷遺跡（平15地点）

【立地と環境】

法正谷遺跡は、館林市の南部、東武鉄道伊勢崎線「茂林寺前」駅の北東方向約300mに位置する平安時代の遺跡である。

本遺跡における発掘調査は、これまでに例がなく、今回の調査地は、遺跡範囲の中央部に位置している。

遺跡は、邑楽・館林台地の南部で、同台地の南辺を深く侵食する谷である茂林寺沼を東方に臨む台地の南部に位置している。遺跡地の現在の標高は約19mで、周辺の低地（茂林寺沼）との標高差は約2mである。

本遺跡の周辺には、同じ台地上に笹原遺跡（縄文、平安時代）が所在しているほか、茂林寺沼を取り巻く台地上に、腰巻遺跡（縄文時代）、咄戸遺跡（縄文時代）、咄戸沼遺跡（縄文時代）、美園町遺跡（縄文、平安時代）、中山東遺跡（平安時代）、下掘工道満遺跡（古墳、平安時代）、前通遺跡（平安時代）などが分布している。このうち、既往調査で住居址等が検出されているのは中山東遺跡、下掘工道満遺跡である。なお、咄戸沼遺跡、中山東遺跡については平成14年度に調査を実施した。



第10図 周辺の遺跡

【調査の概要】

本地点の発掘調査は、堀工町1749ほか2筆の地内における公園整備工事に伴う事前調査として実施した。

今回の調査では、当該遺跡に既往の発掘調査例がないことを踏まえ、遺跡の保存状態、遺跡の範囲、遺構等の有無などの確認を目的とした調査を行った。

調査は、計画地の地形状にあわせ南北方向に6本のトレンチを設定し、地下の状況を確認した。

調査の結果、調査地の現地形は、北西から南東にむけて（茂林寺沼湿原にむけて）低くなっており、地表面で約60cmの高低差がみられた。旧地形においても、北西から南東にむけて低くなっていたことが判明した。

1、2トレンチでは、地表から深度約30～60cmのところでもう層がみられ、両トレンチからそれぞれ土壌6基（時代不明）が確認された。

3、4トレンチでは、地表から深度約20～60cmのところでもう層がみられ、住居址1軒（古墳時代）、土壌3基（時代不明）が確認された。

今回の調査では、3トレンチから住居址等が確認されたため、遺構等の取扱いについて地権者や館林市公園緑地課と協議を行った。

協議の結果、今回の公園整備工事では、現地表面上に盛土をし、掘削することなく工事を実施することが確認され、遺構等の現地保存が可能となったため、当該工事について支障はないと判断した。



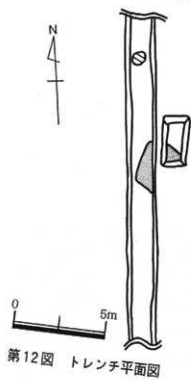
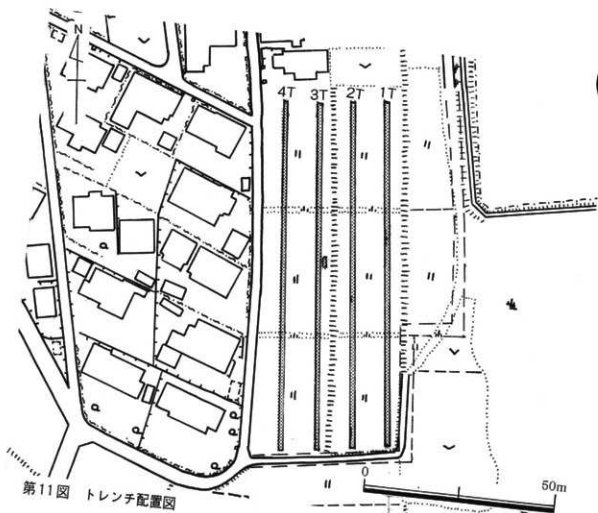
写真11 調査前風景



写真12 調査風景



写真13 トレンチ完掘状態(2トレンチ)



【出土遺物】

今回の調査で、出土した遺物は数十点である。そのなかで、実測、採拓したものを次のとおり取上げた。

1は、壺の口縁部であり、黒褐色を呈している。

2は、縄文土器の破片である。茶褐色を呈し、縄文を施す。

3は、陶質の坏である。5分の3個形で、灰色を呈し、底部には糸切り痕がみられる。

4は、縄文土器の破片である。茶褐色を呈し、縄文を施す。

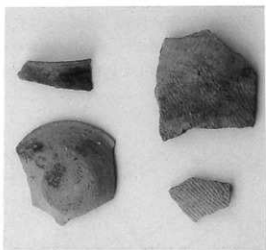
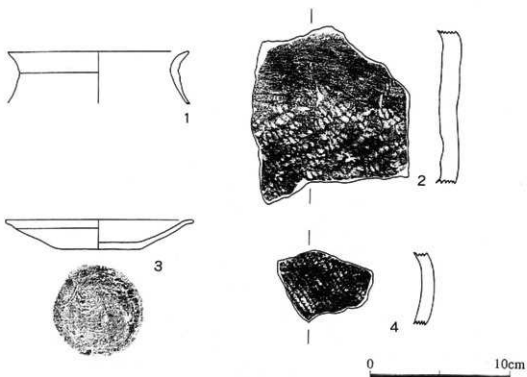


写真15 出土遺物



第13図 出土遺物実測図

4 松沼町遺跡（平15地点）

【立地と環境】

松沼町遺跡は、館林市の西部、東武鉄道小泉線「成島」駅の北方約800mに位置する縄文時代から中世にかけての生産遺跡である。

本遺跡は、平成14年度に群馬県教育委員会が実施した試掘調査によって新たに発見された遺跡であり、今回、館林市教育委員会が行った調査は、遺跡範囲のほぼ全域を占めている。

遺跡は、邑楽・館林台地の西部で、多々良沼を形成する開析谷の東側を南北に連なる比較的平坦で広い台地上に位置する。遺跡地の現在の標高は約23mで、周辺の低地（多々良沼）との標高差は約2mである。

本遺跡の周辺には、同じ台地上に上絹屋遺跡（縄文時代）が所在するほか、多々良沼を取り巻く台地上に、多々良沼遺跡（中世生産址）、日向新田遺跡（平安時代）などが分布している。平成15年度時点では、いずれの遺跡においても発掘調査は実施されていない。



第14図 周辺の遺跡

【調査の概要】

本地点の発掘調査は、松沼町706-12ほか5筆の地内における公園整備工事に伴う事前調査として実施した。

今回の調査は、公園整備計画との調整のため、平成14年度に群馬県教育委員会において実施された試掘調査結果によって発掘調査が必要とされた範囲について、より詳細な試掘調査を行ったものである。

調査は、計画地の地形にあわせ合計17本のトレンチを設定し、地下の状況を確認した。

調査の結果、調査地の現地地形は、南東から北西にむけて（多々良沼にむけて）低くなっており、地表面で約80cmの高低差がみられた。旧地形においても、北西から南東にむけて低くなっていたことが判明した。

各トレンチとも地表から約20～30cmのところでローム層がみられ、特に2～6トレンチ、13トレンチ、15トレンチ、17トレンチから合計9基の炭窯址（古代～中世）が確認された。

今回の調査では、調査区域内から炭窯址や土壌等が確認されたため、遺構等の取扱いについて群馬県館林土木事務所と協議を行った。

協議の結果、公園整備工事で掘削のおよぶ範囲などを再度確認し、掘削がおよぶ範囲については、記録保存のための本発掘調査を行うことで合意し、調査を終了した。



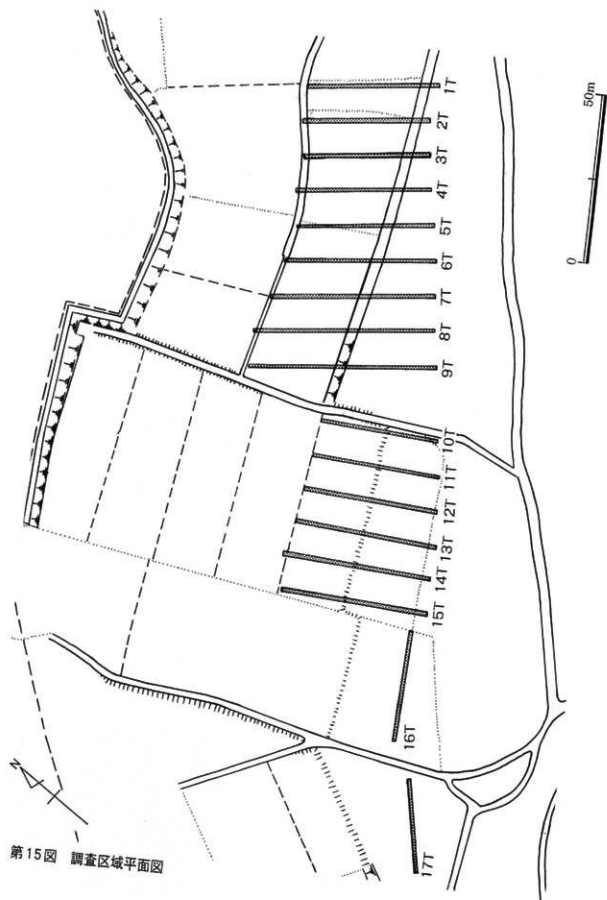
写真16 調査前景観



写真17 トレンチ完掘状態(9トレンチ)



写真18 遺構確認状況(4トレンチ)



第15図 調査区域平面図

【出土遺物】

今回の調査で、出土した遺物は少ない。そのなかで、実測、採拓したものを次のとおり取上げた。
1、2はともに縄文土器の破片である。茶褐色で、どちらも磨消縄文がみられる。

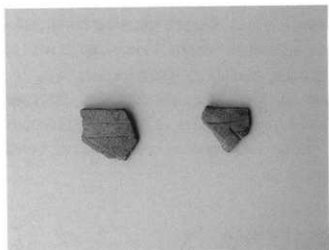
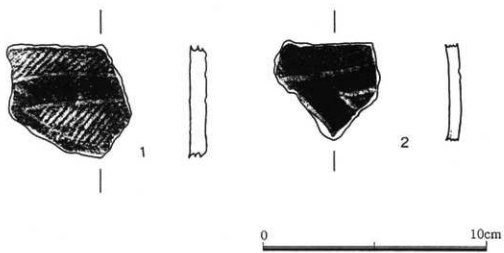


写真19 出土遺物



第16図 出土遺物実測図

5 谷向遺跡B区（平15地点）

【立地と環境】

谷向遺跡は、館林市の南部、東北自動車道路館林ICの東方約2,000mに位置する古墳時代から平安時代にかけての遺跡である。

本遺跡における発掘調査は、過去に一度行われており（平成14年度）、その調査では特筆する遺構等は確認されていない。今回の調査地は、遺跡範囲の南部に位置し、平成14年度調査地点の南側にあたる。

遺跡は、邑楽・館林台地の南部で、蛇沼から谷田川方向へのびる開析谷を南方に臨む低台地上に位置している。遺跡地の現在の標高は約18mで、周辺の低地（蛇沼川）との標高差は約2mである。

本遺跡の周辺には、同じ台地上に、上ノ前遺跡（縄文時代）、間堀1遺跡（縄文時代）、間堀2遺跡（縄文時代、平安時代）、宮内遺跡（縄文、古墳、平安時代）が所在している。このうち、既往調査で住居址等が検出されているのは、間堀1遺跡（縄文時代）である。上ノ前遺跡については平成14年度、宮内遺跡については平成12年度、平成13年度に調査を実施した。



第17図 周辺の遺跡

【調査の概要】

本地点の発掘調査は、谷田川北部土地改良事業に伴う事前調査として実施した。

これまでに館林市教育委員会では、土地改良事業区域内に所在する6カ所の市内遺跡（林、宮内、神明前、咄戸沼、谷向、上ノ前遺跡）の取扱いについて、館林市農村整備課を通じ谷田川北部土地改良区と協議を進め、平成12年度に林、宮内（A区）、平成13年度に宮内（B区）、平成14年度に神明前、咄戸沼、谷向（A区）、上ノ前遺跡の試掘調査を行った。

調査は、該当する調査地内（上赤生田町3548ほか2筆）に合計5本のトレンチを設定し、地下の状況を確認した。

調査の結果、調査地の現地形は、ほぼ平坦な地形ではあるものの、北西から南東にむけて低くなっており、地表面で約10cmの高低差がみられた。

また、各トレンチとも、地表から深度約30～50cmのところまでローム層を確認することができ、旧地形においても、北方から南方にむけて低くなっていたことが判明した。

4、5トレンチからは、過去において小型重機等で掘削などが行われた形跡が見られた。

今回の調査では、遺物が数点確認されたものの、昨年度実施した同遺跡（A区）の結果と同様、特筆する遺構等を確認しなかったことから、当該事業執行について支障はないと判断した。



写真20 調査前景観



写真21 調査風景



写真22 トレンチ完掘状態(1トレンチ)

【出土遺物】

今回の調査で、出土した遺物は数十点である。そのなかで、実測、採拓したものを次のとおり取上げた。

1は、縄文土器の胴部の破片である。茶褐色を呈し、磨消縄文がみられる。

2は、甕の底部の破片である。茶褐色をしている。

3、4は、縄文土器の口縁部の破片である。ともに茶褐色を呈し、3は口縁付近に竹管により点列と沈線を施す。地文は縄文。4は地文が縄文。太い沈線がみられる。

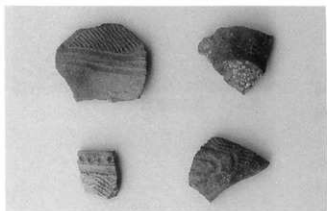
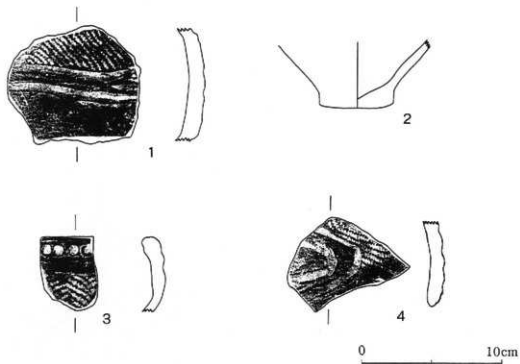
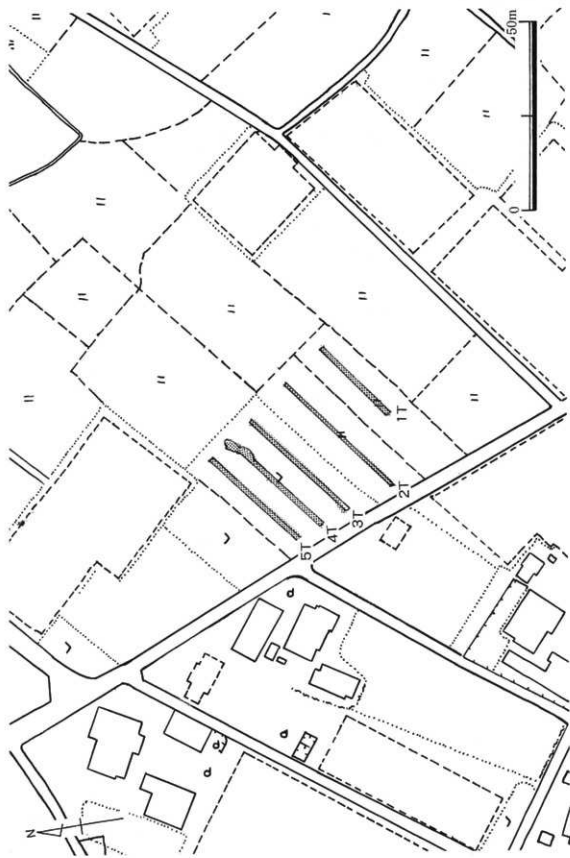


写真23 出土遺物



第18図 出土遺物実測図



第19図 トレンチ配置図

《 参 考 文 献 》

- | | |
|-----------------|--------------------------------|
| 館 林 市 教 育 委 員 会 | 『館林市埋蔵文化財発掘調査報告書』 第1集～第38集 |
| 館 林 市 教 育 委 員 会 | 『茂林寺沼及び低地湿原調査報告書』 第2集 (1986) |
| 館 林 市 | 『館林市誌・歴史編』 (1969) |
| 館 林 市 | 『館林市誌・自然編』 (1966) |
| 館 林 市 立 図 書 館 | 『館林双書』 第1巻～第30巻 |
| 群 馬 県 | 『群馬県史資料編1 原始古代1 旧石器・縄文』 (1988) |
| 群 馬 県 | 『群馬県史資料編2 原始古代2 弥生・土師』 (1990) |
| 群 馬 県 林 務 部 | 『群馬県の貴重な自然・地形・地質編』 (1999) |
| 群 馬 県 教 育 委 員 会 | 『群馬県遺跡台帳・東毛編』 (1971) |

抄 録

ふりがな	たてばやししないいせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	館林市内遺跡発掘調査報告書							
副書名	_____	巻次	_____					
シリーズ名	館林市埋蔵文化財発掘調査報告書	シリーズ番号	第39集					
編集者名	打木洋輔	編集機関	館林市教育委員会					
所在地	〒374-0018 群馬県館林市城町1-1							
発行年月日	西暦2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
陣谷	楠町字陣谷	10207	84	—	—	20030416 20030514	1,433㎡	露天駐車場
妙円寺1	北成島町字妙円寺	10207	26	—	—	20030617 20030710	7,470㎡	保育園建設
法正谷	堀工町字法正谷	10207	102	—	—	20030701 20030723	3,572㎡	公園整備
松沼町	松沼町	10207	—	—	—	20030703 20030723	11,844㎡	公園整備
谷向	上赤生田町字谷向	10207	115	—	—	20031104 20031207	2,028㎡	ほ場整備
遺跡名	種別	時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
陣谷	包蔵地	古墳～平安時代		古墳時代住居址 等		甕、土器片等		
妙円寺1	包蔵地	平安時代		なし		なし		
法正谷	包蔵地	平安時代		古墳時代住居址 等		土器片等		
松沼町	生産址	縄文時代～中世		炭窯址 等		土器片等		
谷向	包蔵地	古墳～平安時代		なし		土器片等		

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第39集

館林市内遺跡発掘調査報告書

発 行 館 林 市 教 育 委 員 会
印 刷 所 オ ー ラ 印 刷 有 限 会 社
発行年月日 平成16年3月31日



文化財愛護シンボルマーク
絵巻の文化と歴史を伝えよう